松代藩文化施設管理事務所だより

第11号

六連銭

平成14年3月

〒381-1231　長野市松代町松代4-1（真田宝物館）

豊臣秀吉から拝領したと伝えられる兜
（矢沢昌子氏寄贈）

二つの矢澤家文書

真田宝物館には、多くの市民の方々から資料のご寄贈やご寄託があります。当館では、松代や佐久間象山に関係するものを中心として、主に歴史資料や美術品を収集し保管しています。これら資料は、真田宝物館で展示公開されています。

さて、こうしたご寄贈、ご寄託いただいている資料のなかから、矢澤家に関わる資料について取り上げることといたします。

矢澤昌子氏寄贈資料

平成5年、長野市松代町在住の矢澤昌子氏より矢澤家伝来の古文書や什器のご寄贈をうけました（なお、寄贈の経緯などについては、北村保「矢沢家文書について」『松代』7号　参照）。この矢澤家は、松代藩筆頭の無役席家老の家筋として重職を勤めてきました。

受け入れ時の整理によりますと具足二領、刀剣類十三腰、武具九点、古文書大小箱十箱、調度品六十点、服飾品九点、図書十三点、典籍大小箱二十箱、遊具等七点でした。その後、古文書大小箱十箱については、平成8年より仮目録の作成作業がおこなわれ、現在では閲覧可能となっています。一六〇〇点弱の古文書群です。この古文書群について最近では、鬼頭康之氏が詳細な分析をされています（鬼頭康之「矢澤家と矢沢家文書について」『松代』13号）。

鬼頭氏は、藩政時代の古文書について、①真田家・矢澤家・鎌原家などの家譜、②矢澤家内の動向、③真田家関係文書、④藩政、⑤日記類、⑥原八郎五郎・望月治部左衛門関係文書（恩田杢時代）、⑦幕末の松代藩の京都警衛、⑧外夷への備え、⑨佐久間修理一件、⑩山寺源太夫御咎め一件、⑪小林盛之丞御咎め一件、⑫松代藩江戸屋敷や松代城などの絵図、⑬無役席・家老の心得類、⑭武家社会の儀礼礼典、⑮藩士の文武修行、⑯兵書・兵制改革、⑰軍鑑類の写本、⑱短歌類、⑲小笠原流礼儀作法、⑳定火消関係、㉑災害関係、㉒山論・水論、㉓湯治関係、㉔馬の治療、㉕文武学校関係、㉖免許・秘伝、㉗忌服関係、㉘寺社関係、㉙交通と運輸、㉚その他、に分類されています。

こうした、江戸時代の古文書のほかに、矢澤家には戦国時代から近世初頭にかけての古文書三十七点が伝来しています。その多くは『信濃史料』に採録されており、夙にしられた文書群です。この文書群の特徴は、真田家に伝来した文書群を補完する役割を持つということです。すなわち真田家文書ではわからない部分が矢澤家の文書から得られるのです。

武器・武具類では、豊臣秀吉から拝領したとされる甲冑などが伝来します。今後、目録化をすすめ、全容を明らかにしたいと思います。

矢澤誠敏氏寄贈資料

平成13年、真田宝物館に長野市松代町在住の矢澤誠敏氏より、伝来の古文書や什器類のご寄贈をいただきました。

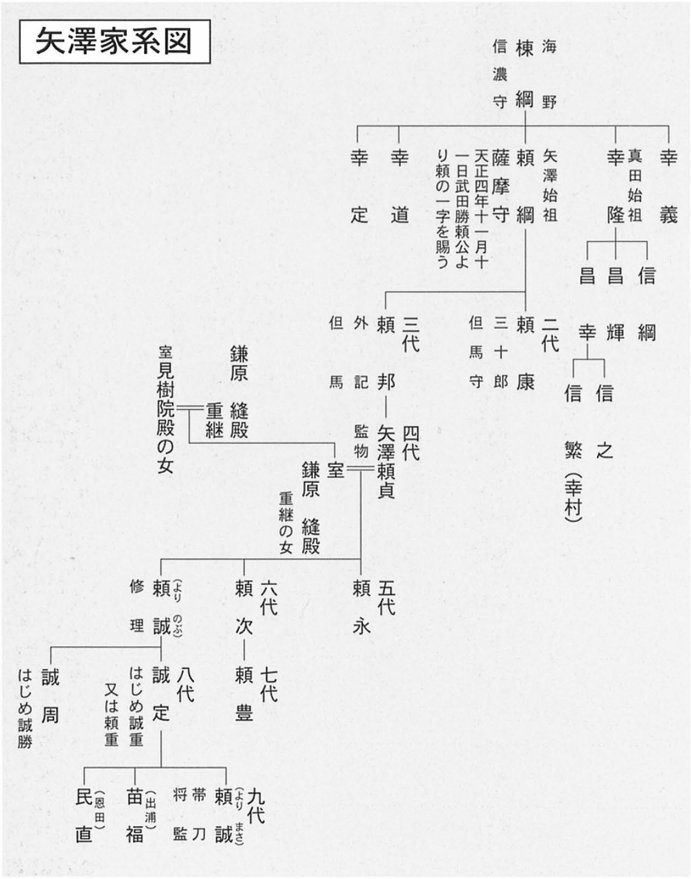
矢澤誠敏氏のお宅は、真田信之の娘・見樹院がはじまりです（詳細は矢澤誠敏「見樹院の後嗣と矢沢家」『松代』7号　参照）。見樹院は慶長十五年頃に佐久間勝次に嫁いでいます。しかし、元和二年に、佐久間勝次が二十八歳の若さで没し、このため、信之の居していた上田に戻りました。上田城の西の台に住んでいたことから、「西の台殿」と呼ばれていました。元和8年に信之が上田から松代に移封されると、見樹院も共に松代に移ります。松代城の二の丸に住したことから、「二の丸殿」と呼ばれました。

さて、見樹院は遺言として後嗣に矢澤頼誠をあげました（矢澤家系図参照）。この矢澤家の末裔が矢澤誠敏氏にあたるのです。

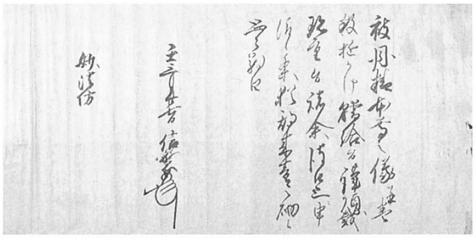
二つの矢澤家文書

さて、両矢澤家に伝わった古文書がこのたび真田宝物館に収蔵されました。戦国時代から近世初頭にかけてのものを比較しますと、どうも本来はひとつの古文書群として存在していた可能性が想定されます。こうしたことが想定されるのは、矢澤家に限ったことではなく、松代藩士のなかの矢野家・河原家・大日方家などもその可能性があります。

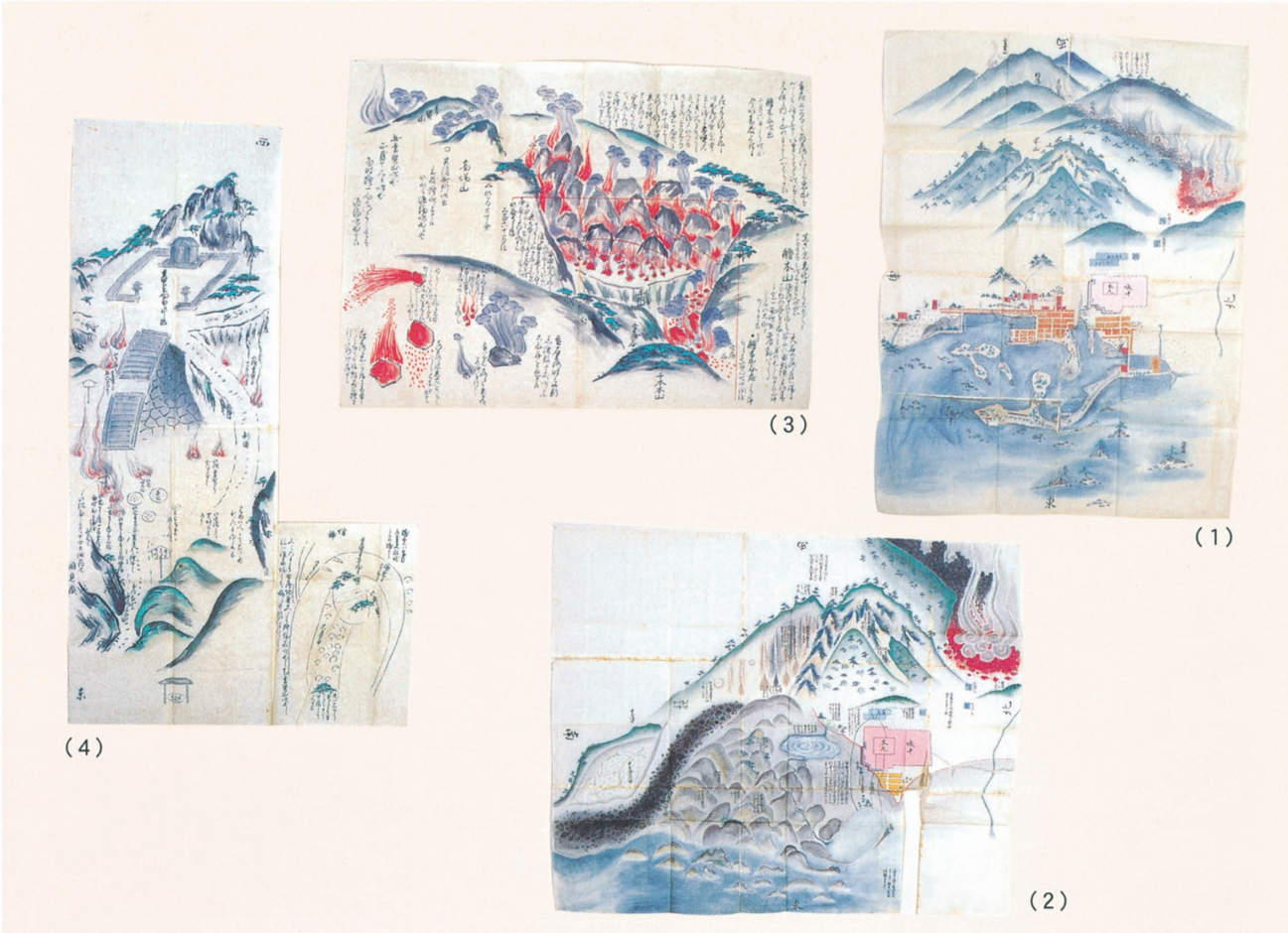
おそらくは江戸時代のはじめに、分家等によって伝来の古文書が分割されたのでしょう。このように古文書が分割されることは、家を分家するのと同じように大きな意味を持っていたのかもしれません。ひいては、近世の武家社会のあり方を考える好材料になる可能性もあります。この点は今後の検討課題です。



真田信之の安堵状　（矢澤誠敏氏寄贈）


武田信繁書状　（矢澤昌子氏寄贈）

軍書七ヶ之大事　（矢澤昌子氏寄贈）



◇資料紹介◇

真田宝物館蔵『島原大変』関係絵図

北原糸子

上記四点の絵図は「寛政四年壬子春　肥前国島原山焼・山崩・高波絵図面四枚」と書かれた袋に収められている。後に文書整理をした時に付されたと推定される貼紙には「幸弘公手沢品」と記され、天草一揆城攻図一枚が加えられた。

寛政四年（一七九二）の島原普賢岳噴火の様子を描くこれら四点のうち二点について島原の地元に残されている絵図とほぼ同一であることがわかった。はるか遠隔の地の火山災害が信濃の一大名の愛蔵書のうちに収められているという興味深い事実について既存の研究論文などから推定されることを簡単に述べておこう。

（1）は島原本光寺蔵の「寛政四年大震図」と構図が同一である。（2）は島原市図書館松平文庫蔵「島原大変大地図」と右肩の炎立つ溶岩の部分を除き、文中の説明、構図ともに同一である。これら「寛政四年大震図」、「島原大変大地図」は寛政四年六月三日島原藩が幕府に報告をするために提出し、書き直しを求められた絵図である。したがって、藩主幸弘（一七四〇～一八一五）の手許にあった絵図は、今のところ、場所や時期は特定できないものの、幕府に提出されたものが写されたと推定するのが自然であろう。

（3）、（4）の元となる絵図はこれまで地元の島原では発見されていない。

（3）は「艪木谷吹出、二月六日より吹出今以甚敷御座候」とあるから、寛政四年二月六日の噴火以来活発な噴火活動を開始した時期の記録である。（4）は噴火口の大きさや裂け目などの地変を書きとめるとともに、「是より先へ不可行」と立札があるにもかかわらず、見物人が多くて道ができてしまったと興味深い事実を書留めている。後者二点の絵図について、制作時期や描かれた噴火活動についての解明が待たれる。

…　参考文献　…

小林茂他「島原大変関係絵図の検討」・関原祐一他「島原大変時における島原藩の幕府報告図」、野口喜久雄・小野菊雄編『九州地方における近世自然災害の歴史地理学的研究』（昭和59・60年度科学研究費報告書、1986）所収